様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月２８日現在

機関番号：14301
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2009～2012
課題番号：21320131
研究課題名（和文）
ヨーロッパ人の文献史料にもとづく清朝前期の政治と社会に関する総合的研究
研究課題名（英文） The politics and society of the early Qing dynasty seen from literature in European languages.
研究代表者 松浦 茂
(MATSUURA SHIGERU)
京都大学・人間・環境学研究科・教授
研究者番号：60145448

研究成果の概要（和文）：
明清時代の中国を訪れたヨーロッパ人は数多く、かれらが残した記録は膨大である。それらの記録は漢文史料とは独自の価値を持つが、それを使用した研究はこれまではあまり行なわれなかった。本プロジェクトにおいては、3 人の研究者がそれぞれロシア語、ポルトガル語およびオランダ語、英語の第一次史料を使って、(1)キャフタ条約締結に至るロ清両国の外交交渉(松浦茂)、(2)明清交替時期の南中国の政治状況(中砂明徳)、(3)いわゆる「広東体制」の実態(村尾進)を研究した。それぞれの研究成果は学界に一石を投ずるものであり、今後の発展が期待される。

研究成果の概要（英文）：
During the Ming and Qing dynasties many Europeans visited China, and there has been preserved an enormous amount of related material. This material has its own distinctive value, different from materials in the Chinese language, but to date little active use of it has been made in Japanese research. In this project three researchers studied (1) the diplomatic negotiations between Russia and the Qing that led to the conclusion of the Treaty of Kyakhta (Matsuura Shigeru), (2) political conditions in Southern China at the time of the Ming-Qing transition (Nakasuna Akinori), and (3) the actual circumstances of the so-called “Canton System” (Murao Susumu) by using primary sources in the Russian, Portuguese and Dutch, and English languages. Each of these studies should stimulate discussion in academic circles, and it is hoped that further advances will be made in the future.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
21 年度	2,300,000	690,000	2,990,000
22 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
23 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
24 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総　計	6,000,000	1,800,000	7,800,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：中国古代・中近世史

１．研究開始当初の背景

（1）18 世紀前半に北京に滞在したイエズス会士、ゴービルの『北京通信』を読んだときに、清朝の宮廷内や皇族の間にロシアの文化が深く浸透していることを知った。こうした事実は漢文史料からはうかがい知ることはできず、あらためてヨーロッパ人の文献史料の有用性を思い知らされた。

（2）さらに 1727 年に北京に半年間滞在したロシアの特命公使、ヴラジスラヴィッチの報告書『中国の実力と現状に関する秘密の報告』には、中国史の常識をくつがえす記述がしばしばみられる。たとえば清の軍事力はロシアの比ではなく、ロシアは清の一部を占領することは可能であるが、しかし戦争にはコストがかかり、それに見合う利益を得ることはむずかしいので、清とは友好的な関係を保ち貿易を行なう方がよいと語る。1793 年に清を訪れたイギリスのマカートニー使節もまた、ヴラジスラヴィッチと同様の見解を述べているので、そうした評価が真相に近かったと考えるべきである。そうであれば、清は当時世界最強の帝国であったという通説を見直す必要がある。

２．研究の目的

（1）ヨーロッパの言語で書かれた史料は、中国を研究する有力な手段であるが、それを十分に使いこなした日本人の研究者は多くない。わずかに東西交渉史や外交史の立場からの研究があるだけである。しかもその中で利用された史料は見聞記や報告書などに限られ、清朝の政治や社会全般を分析することはなかった。

（2）本研究で使用する『中国の実力と現状に関する秘密の報告』、『北京通信』、アジュダ図書館所蔵のイエズス会年報、キャンベルの日記などは、質が高く、記述の幅も広い。これらの史料を集めてその内容を研究することにより、清前期の政治、具体的には政策を決定する過程、皇帝と人民の関係、民衆の現状、軍事力の現状、外交方針などを明らかにする。そしてこれらを通して、漢文史料にもとづく研究とは異なる視点、異なる評価を提示する。

３．研究の方法

（1）従来のプロジェクトは単独か、あるいは同じ研究を行なう複数の研究者で構成されたが、ヨーロッパ人の文献史料を使うもの同士が広く連携することはなかった。本研究においては専門分野を異にする研究代表者と研究分担者が緊密に連携して、それぞれの知識・情報を交換して、清全体の政治・外交・社会・経済を解明する。

（2）松浦茂は、ヴラジスラヴィッチ『中国の実力と現状に関する秘密の報告』を最後まで和訳する。また注と解題を書くために、『露中関係』などのロシア語文献を読む。またモスクワの国立中央公文書館において、ヴラジスラヴィッチの原本を確認して、翻訳に使用しているテキストと内容の照合を行なう。

（3）中砂明徳は、ハーグ国立文書館所蔵のオランダ東インド会社関係史料と、ポルトガルのアジュダ図書館所蔵のイエズス会関係史料を収集し解読する。さらにローマのイエズス会文書館などで現地調査を行なう。

（4）村尾進は、18 世紀に刊行された英語の報告書（イギリス使節団、イギリスおよびスウェーデンの東インド会社、インドから来航した貿易商人によるもの）を網羅的に収集する。また香港、マカオ、広州の諸機関において現地調査をして、関連文献を収集する。

４．研究成果

（1）松浦は、『中国の実力と現状に関する秘密の報告』の和訳を終わり、訳文の見直しを行なっている。ヴラジスラヴィッチの報告書はロシア以外の国で翻訳されたことがなく、その内容が紹介されれば、大きな反響を呼ぶことは確実である。なおその一部は、「ヴラジスラヴィッチ=ラグジンスキーの中国報告書」と題して口頭発表を行なった。

（2）松浦は、キャフタ条約締結に至るロ清両国の外交交渉に関して検討を終わり、論文を準備している。この中で、なぜ両国は北京とブーラ川の 2 か所で交渉を行なうことになったのか、また交渉の過程では、清朝の中華思想に対してロシアが国際法で対抗したことなどを明らかにする。北京会議については、従来詳細な研究が発表されたことはない。

（3）松浦は、「清朝の遣ロ使節とロシアの外交姿勢」を発表して、ロシアが 1730 年代に清が派遣した使節を丁重に迎え入れたこと、対ジュンガルの同盟を作ろうとする清の策には慎重であったことを述べた。またこうした方針が基本的にはヴラジスラヴィッチの提案にもとづくことを示した。

（4）中砂は、「イエズス会士フランチェスコ・サンビアシの旅」において、主にアジュダ文書を用いてサンビアシの足跡をたどり、かれと南明の 3 政権の関係を明らかにした。従来、北京宮廷との交渉に関心が集中しがちだった中国イエズス会研究に、新たな視角を提供したものとして高く評価されている。

（5）中砂は、「マカオ・マニラから見た華夷変態」において、メキシコの司教ホアン・デ・パラフォックスの著作『タルタリア人の中国征服史』の材料となった記録がイエズス会の文書中にあることを指摘し、パラフォックスがそれに加筆した部分を確定するとともに、マカオから見た王朝交替に関する記述となっている当該文書の内容を詳細に検討している。

（6）村尾は、「特に一所を設けて」において、バチカン市国に所蔵されている、陳昂の漢文奏摺の抄本を利用して、「広東体制」は長崎を中心とした禁教・外国商人の管理という江戸時代日本の動向が、広州・マカオにまで伝播・拡張したものにほかならないことを、ヨーロッパ人の文献史料にもとづいて示した。ユニークな視点をもつ研究で、高く評価される。

（7）村尾は、2 回の学会発表において、「広東体制」の崩壊の意味を広州知識人の視点から述べ、さらにその視点がアロー戦争時の清側の動きを再解釈する手掛かりとなるという展望を示した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 村尾進、「特に一所を設けて」－碣石鎮総兵陳昴の奏摺と長崎・広州－、中国文化研究、査読無、第 29 号、2013、1-32
② 中砂明徳、マカオ・マニラから見た華夷変態、京都大学文学部研究紀要、査読無、第 52 号、2013、95-194
③ 松浦茂、清朝の遣ロ使節とロシアの外交姿勢、アジア史学論集、査読無、第 4 号、2011、1-22
④ Matsuura Shigeru、The Survey of the Maritime Province in 1709 by the Jesuit Father Régis、アジア史学論集、査読無、第 3 号、2010、1-29
⑤ 中砂明徳、イエズス会士フランチェスコ・サンビアシの旅、アジア史学論集、査読無、第 3 号、2010、30-69
⑥ 村尾進、広州と澳門の「間」、アジア史学論集、査読無、第 3 号、2010、70-83

〔学会発表〕（計 4 件）

① 松浦茂、ヴラジスラヴィッチ=ラグジンスキーの中国報告書、満族史研究会、2011 年 5 月 21 日、天理大学
② 中砂明徳、イエズス会士の中国研究、連続講座「東アジア書誌学への招待」、2010 年 12 月 17 日、学習院大学
③ 村尾進、都市広州と天子、満族史研究会、2010 年 5 月 29 日、駒澤大学
④ 村尾進、増田えりか、Guangzhou and the Last Days of Siam’s Tribute to China after the Opium War、2nd Conference Canton and Nagasaki Compared、2009 年 12 月 1 日、東京大学

〔図書〕（計２件）

① 中砂明徳、名古屋大学出版会、中国近世の福建人―士大夫と出版人、2012、567
② 松浦茂、道坂昭広、他６名、京都大学大学院人間・環境学研究科、京都大学大学院人間・環境学研究科漢籍目録、2010、179

６．研究組織

(1)研究代表者　松浦　茂
(MATSUURA SHIGERU)
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
研究者番号：60145448

(2)研究分担者　中砂　明徳
(NAKASUNA AKINORI)
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50237286

(3)連携研究者　村尾　進
(MURAO SUSUMU)
天理大学・国際文化学部・教授
研究者番号：10239478